

◆小誌「展景」が百号となった。振り返ってみようと、創刊時に主宰者であった布宮みつこの歌集『紅^{べに}』（二〇〇二年）の奥付を見てみた。敬意を表し、著者略歴を引用する。

1928年5月山形県西村山郡河北町谷地に生まれる。

旧制谷地高女を経て、1948年宮城県女子専門学校国文科卒業。

1952年結城哀草果に師事、「赤光」会員となる。

1956年『布宮みつこ詩歌集 女の音』刊。翌1957年3月上京。

1987年上田三四二氏に師事、「沙羅」会員となる。

1993年3月季刊同人誌「展景」創刊、現在に至る。

本名・山内美津子。

生家の近くの寺には俳人・名和三幹竹^{なわさんかんちく}がおり、どちらかといえば俳句の盛んな町だったが、みつこは「自分の気持ちが俳句に収まりきらないのよ。それで短歌にいったの」といつていた。中学校の教員をしたが、体が弱いため、立つてする仕事は長く続けられないだろうと思ったらしい。二十代で詩歌集（山形市、高陽堂書店）を出したあと、翌年、東京に行っている。それからは編集者と

して、家庭科の教科書副読本や仏教書、のちに講談社学術文庫にかかわって知恵を絞り、アイデアを出し続けた。著者としての上田三四二氏に出会うまで、三十年間、短歌はつくっていない。上田先生のアドバイスもあって、みつこの作歌意欲はどんどん湧き出たようだった。少人数の仲間ですぐ、東上野のイラストレーターのアトリエに集まって短歌の勉強会を続け、「展景」創刊となる。わたしがワープロで入力しコピーしたものを送ると、池田桂一さんが製本してくれた。文字通り、手づくりである。清紫会というエッセイの勉強会も始めた。みつこが目指すものは、短歌や俳句に限らず、エッセイ、絵手紙もありの雑誌だった。しかし二〇〇五年、七十八歳で急逝する。みつこの短歌や文章をもっと見たかったが、もはや叶わないことだ。生涯、頭の中は意欲的な人だった。もう少し長生きしてくれば、わたしたちは面白いものを読むことができたかもしれない。

「展景」は、実に二十七年間も続いてきたことになる。二〇〇五年からはわたしが引き継いだわけだが、二〇一一年三月のインターネット化が大きな役割を果たした。短歌、俳句、エッセイ、詩、写真、なんでもありの同人誌として、これからも続けていきたいと思っている。

◆市川茂子さんが「外山滋比古先生の思い出」を書いてくれた。コロナ禍で清紫会を開くことはできないのだが、率直な思いをつづつてもらい、外山先生とのさまざまな場面を思い出すことができた。ありがとうございます。

◆河村郁子さんの短信にあるとおり、短歌結社「未来」誌十一月号の「未来広場 みらい・プラザ」

に九首が選ばれた。僭越ながら、ここに転載させていただきます。

青マスク赤マスクある今の世に己の色モテ睡蓮は咲く

〈所属・かやの実集〉 布宮慈子

睡蓮に人ひき寄する力あり鶉色の花ひらかむとして

睡蓮の近くに立てばあなんと思はぬ高さ吾の背と等し

もの思ひせぬごとく飛ぶ青鷺のフロントガラスを横切りてゆく

暑き陽は田んぼの稲を実らせてまだ赤くない赤とんぼ飛ぶ

母の家の草刈り頼めばシルバーさんは茗荷の一角のこして刈りぬ

盗人のやうに採りたり母の家の茗荷にはかに土より出でて

ひつそりとくる新盆のためわれは回り灯笼を買ひ求めたり

風通る寺といへども座らずに白睡蓮見ることしの夏は

新型コロナのため、種々の行事が取りやめになっている。仏事においても同様である。正直に言えば、今まで行わなくてもいいことが多すぎたのではないかと思う。しかし、地方の感染もここに来て勢いを増している。油断はできない。

◆たいせつな人が次々に亡くなった一年だった。先ごろ、編集の師匠である村井弘明さんが亡くなられたという知らせを受けた。享年八十六。ご病気と伺っていたが、前向きに治療をしているという事だったので、残念でならない。村井さんは編集のすべてを教えてくれた方だ。わたしがフリーランスになっても編集の仕事が続けられたのは、ひとえに村井さんのおかげである。辞書づくりに始まり、さまざまな仕事を一緒にさせていただいた。その合間に聞く話はどれも面白かった。「東京は銀座の生まれ。銀座は銀座でも戸越銀座」というのが常であった。幼いころ満州で過ごし、馬車で小学校に通ったこと、ロシア人の女の子と遊んだこと、引き揚げてきてから父親の郷里・石川県でいじめられたこと、同級生のあれこれ、アルフォンス・デーケンさん（上智大学名誉教授、故人）の口癖、三島由紀夫が自決の日に被っていたのは水道橋の常見帽子店の帽子だったとか（帽子店のご子息・常見氏は学者。村井さんの友人）、鮮明な記憶のまま話してくださった。いつも紳士的なたずまいの村井さん、きっと天にあっても背筋をピンと伸ばして楽しい話をしているにちがいない。合掌。

（布宮慈子）

muninokai.com

上記のサイトでは、フルカラーのオンライン版「展景」を公開しています。

季刊展景
100号

二〇二〇年十二月二十日 発行

編集・発行人 布宮慈子

制作 スタジオ・マージン

無二の会「展景」発行所

山形市上町二一―一七―二〇一

info@muninokai.com